
ハワイアン獅子舞協会のレモンラズベリーラブドリーム【完結】
ネアンデルタル家元

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハワイアン獅子舞協会のレモンラズベリーラブドリーム【完結】

【作者名】

ネアンデルタール家元

【あらすじ】

ハワイアン獅子舞協会が百年に渡り軍事独裁をバックギャモン神社の境内で敷いてきた。だがその圧政の歴史がいつも簡単に崩れようとしている。強権的な賽銭の取り立て、各市町村から巫女候補の拉致連行、婦女暴行、お御籤の購入義務、夜店の略奪などハワイアン獅子舞協会はきらびやかなサービスの影で悪逆非道を繰り広げた。その積年の恨みがバックギャモン神社城下町で渦巻いていた。檀家の怒りが臨界点を突破したのはトタン男爵の狼藉だ。女子高生巫女にあいうえおな関係を重ねてたちつてとな状態になりまみむめもな

結果を招いた。怒り狂った女子高生の母親たちはハワイアン獅子舞協会許すまじ！とチャルメララッパを吹きならしバックギャモン神社境内を練り歩いた。これに対し知床マジシャン軍団が神社側の出動要請に応じた。「ハワイアンと知床。歴史の重みと格が違うよw」とハワイアン獅子舞協会のガツハツハ28世大王は多田を括弧していたが知床マジシャン軍団は城下町の各地で住民の熱い歓迎を受け破竹の勢いで獅子舞を蹴り壊した。

ハワイアン獅子舞協会の青春

ハワイアン獅子舞協会が百年に渡り軍事独裁をバックギャモン神社の境内で敷いてきた。だがその圧政の歴史がいつも簡単に崩れようとしている。強権的な賽銭の取り立て、各市町村から巫女候補の拉致連行、婦女暴行、お御籤の購入義務、夜店の略奪などハワイアン獅子舞協会はきらびやかなサービスの影で悪逆非道を繰り返した。

その積年の恨みがバックギャモン神社城下町で渦巻いていた。檀家の怒りが臨界点を突破したのはトタン男爵の狼藉だ。女子高生巫女にあいうえおな関係を重ねてたちつてとな状態になりまみむめもな結果を招いた。怒り狂った女子高生の母親たちはハワイアン獅子舞協会許すまじ！とチャルメララッパを吹きならしバックギャモン神社境内を練り歩いた。これに対し知床マジシャン軍団が神社側の出動要請に応じた。「ハワイアンと知床。歴史の重みと格が違うよw」

とハワイアン獅子舞協会のガツハツハ28世大王は多田を括弧付けたが知床マジシャン軍団は城下町の各地で住民の熱い歓迎を受け破竹の勢いで獅子舞を蹴り壊した。そして倒れた石灯籠六百トン、燃えたお御籤一万発の犠牲を出してガツハツハ28世親衛隊は総崩れになった。バックギャモン神社城下町の反乱軍は神社の山門をテクノ耳かきで打ち破った。そしてついにバックギャモン神社は知床ホルモン衆に完全包囲され蝋燭の灯も風鈴であった。「これは拙い」ガツハツハ28世は呪文で可愛い女子高生に性転換しルーズソックスとパンツの見えそうな短いスカートを履いて顔もガングロにして渋谷の街へ素敵なヤンキー女子高生を探しにいった。

バックギャモン神社でお茶した後、女子高生コスプレで渋谷へ向かう。「ハワイアン系の女の子に憧れていた私は、ハワイアン獅子舞

協会に所属していたが、バックギャモン神社の裏の裏の裏を騒がす女のコの姿に恐怖しているんだ。」そう話し、バックギャモン太鼓で太鼓担いでハワイアン獅子舞を叩かせたあと、バックギャモン太鼓で太鼓をたたかせながら、ハワイアン獅子舞を大大大叩き出してしまった。そしてハワイアン獅子舞といえば、獅子舞とは関係ないが、バックギャモン太鼓は世界的に有名なハワイアン獅子舞の一種である。その太鼓担ぎの後、女の子がふらっと出て女のコがいた。「お巡りさん！大丈夫？」「大丈夫」私は「ハワイアン」を心で叫びハワイの女性がハワイの男性に恋をしているらしくその恋を応援し応援されているらしい。「うん（ハワイ）」「でもハワイでの恋を応援するハワイの女性は恋をして応援したい気持ちだよ」世子は少女の唇に水仙の花を感じた。そしてほわほわした気分でインテリアを贈った。太鼓使いの少女は「結婚しましょう」といい「はい」と返事をした。するとギャルらしい少女は喜んだ。「結婚しよう」その少女には「ハワイアンって何ですか？」と尋ねることになった。28世はしまった！と思った。「ハ、ハワイアンってワインだよ」咄嗟の出まかせを言った。するとお仕着せの囃ませ犬が少女を襲った。28世は女子高生でありながら囃ませ犬と勇敢に戦い

「はいはい！お嬢ちゃん、ハワイで結婚しましょ。」と言ってハワイから追っていく。囃ませ犬の少女は少女が「ハワイアン」を心で叫び

「ハワイで結婚しよう。でもハワイで結婚しないと私、ハワイから追われるなんで。」

ハワイを愛していればハワイから離れられないけどハワイから離れ

られないって。

ハワイで結婚したらハワイから離れられない。ハワイで結婚しよう。でもハワイでハワイに戻されるなんでハワイから離れられない。ハワイでハワイに戻されるなんでハワイでハワイに戻されないからハワイから出れないで。

ハワイに戻されるって、ハワイに帰ってもいいじゃない。

でもハワイに帰らなくて、ここで帰ろうと思ったらハワイでハワイに戻ってハワイから出られないじゃん！ハワイが愛おしくなるとハワイが恋しくなっちゃう。

ハワイでハワイに戻ったらハワイでハワイに戻らないとハワイから追われちゃう。

ハワイでハワイに帰れないって。ハワイでハワイに帰らないとハワイから出られないんです。」

少女はハワイに帰りたくないと思った。そしてハワイに帰る、そう心に決めた。

「でもハワイに帰る。」少女が感じたのはそこに帰るところがある。

「ハワイに帰る。」と思った少女はハワイに帰って、ハワイから消えた。

「これでお兄ちゃんのハワイは、私と一緒に見られたね！」

「お兄ちゃんのハワイ、私は好き。お兄ちゃんを信じて、お兄ちゃんにハワイのこと教えてもらいたい。でも、私のハワイに戻ってくるのかな。」

「それなら私もハワイに帰るのよ。私もハワイに帰るんだから」

11の日の午後2時、私はバックギャモン太鼓とパンツを履いていた。渋谷の渋谷ギャルゲショップ「ハワイアン太鼓公園」は29の午後3時というタイミングで開店したが、既に来ていた客の数が10人ほどにまで減って来ていた。その客が多い売り場の端に回って、

私は声をかけた。「おはようございまーす。今日は、もうお店に来られなくていいんですか？」

「はい、今日はハワイに帰るのよ。もう帰るの。ここから私のハワイに帰るわ！」

「それは嬉しいなあ。でも、いつ帰ったか知ってます？ 今の時間からハワイに行ったり、帰ったり。」

「知ってるわよ。ハワイから私のハワイに帰った時は、ハワイからハワイに帰るからね。私のハワイはハワイに帰るよ。」

「でも、お兄ちゃんはもうハワイに行ったよ。もう私のハワイなんだよ」「なんだ、お兄ちゃんはもう来なくていいんですか。それは残念なお知らせです。私はハワイに帰るわ。」「もう来なくていいよ。ハワイに帰る。ハワイでお兄ちゃんのこと覚えさせてよ。」「そうだったわ、もっと早く、お兄ちゃんのハワイに帰ったわ！」

「ありゃ、今度行ったときは「お兄ちゃん、今日こそは「私のハワイに戻る。」と思ったのに、またお兄ちゃんは忘れちゃったんだから。今度は違うよ！」

ガッハツハ28世は太鼓娘に熱いまなざしを送った。

「うん！わたしもハワイに行くね！」

こうして彼女はハワイアン獅子舞協会の座をあっさり捨ててしまった。

どうなる。風雲急を告げるバックギャモン神社。

ハワイ帰りの不敵なアイツ！

ツクギヤモン神社とうとう無血開城した。知床どさんこ民謡衆はハワイアン獅子舞協会の残党を塩バターしょうゆ樽で蹴散らしつつ城下町のハワイアン酋長を白い恋人で買収して回った。

「ウホッ?! ホワイトトチョコ?」

前述のとおりハワイアン獅子舞は獅子舞とは関係ないがバックギヤモン太鼓は世界的に有名なハワイアン獅子舞の一種である。ガツハツハ28世という指導者を失ったもののハワイアン獅子舞協会は神社界隈に根付いておりそう簡単に駆逐できるものではない。バックギヤモン太鼓を子守歌にして育ちバックギヤモン太鼓で求愛しバックギヤモン太鼓で胎教する民族である。地図のどこにあるかもしれない知床民謡など聞き覚えの無いサウンドが易々と受け容れられる素地はなかったのである。

しかし一皮剥けたバックギヤモン太鼓は懐いてくる。

「あーら、何? バックギヤモン太鼓さん。なんで懐いてくれちゃったの? ホワイトトチョコ、ホワイトトチョコ」

「ウホッ! なんで、それにホワイトトチョコなの?」

「あっ、ありがとう! ホワイトトチョコ」

愛おしそうにバックギヤモン太鼓を撫で、その中に秘めていた想いを知った。

「ああ、ホワイトトチョコだ、ホワイトトチョコ」

バックギヤモン太鼓の音が笑っているかのように聞こえる。

その後2人は大親友といってもいい仲に発展、このころからバックギヤモン太鼓とハワイアン獅子舞の愛の仲は深まるのであった。太鼓と獅子舞の歴史的和解に世界は驚嘆した。ハワイのカップレビー

チで眩しいビキニ姿のバックギャモン太鼓が小麦色に日焼けしたハワイアン獅子舞にキスをした。そして生まれたのが羽合温泉だ。親譲りのヤマンバギャルで顔はかなりきつい。羽合温泉は母親の故郷から知床民謡軍団を除去すべくハワイアン煎餅を携えて羽田に降り立った。

ちなみにハワイにはハワイ以外にも、ハワイの民族は他に4人存在した。そのうちハワイというか「ホノルル」って町はかなり有名だったらしく「ハワイ王国」と呼ばれている。

ハワイでのバックギャモン太鼓の活動は激しいもので、ハワイアン獅子舞もバックギャモン太鼓も「バックギャモン太鼓の伝説」(http://www.towoodoce.jp)という書籍にまで登場したほど、ハワイに大きな被害者を出している。また多くのハワイヤーがバックギャモン太鼓で踊っている。ハワイには生け贄にされているもの捧げられた魂がハワイの民謡に変えられている。ハワイアン獅子舞を見に行った日にはハワイヤーで死んでいるハワイの民謡を聞かなくてはならない。

知床マジシャン軍団の秘密

極限のバックギャモン神社。ハワイアン獅子舞協会の七千年に渡る
圧政が一夜にして崩壊した。原因はバックギャモン神社氏子総代会
の腐敗と青年団の癒着そしてパトロール病の蔓延だった。パトロー
ル病は獅子舞太鼓を腐らせる最恐の病原菌だ。感染症の蔓延とワク
チン開発の遅れが氏子総代会を蝕んでいる間に北海道から知床ひよ
っとこ踊り戦車軍団が侵攻して来た。知床マジシャン軍団は蝦夷の
伝統芸能であるひよっとこ踊りで万病に効く。ハワイアン獅子舞協
会は日本古来の踊りと濃厚でクリーミーな北海道バターにやられた。
ただでさえパトロール病で弱っていた若い衆はとどめを刺された。
そしてハワイアン獅子舞協会に引導を渡したのは人間だけではなか
った。知床平野のクールでビューティーな旋風が塩キャラメルたっ
ぷりな雨を運んできた。「うーん。中標津チーズう〜」ハワイア
ン獅子舞協会の帝王ガツハツハ28世も裸足で逃げ出した。そして
抜き足差し足で太平洋を渡ってハワイ諸島に亡命した。知床マジシ
ヤン軍団はバックギャモン神社を後ろ斜め上回し下痢で豪快に破却
した。その跡地には市ケ原のっぺらぼうの森からピレスロイド系冷
ややっこ工場が移転して来た。「知床マジシャン軍団じまんのタレ
をご賞味ください！」軍団長パピローマイルス之介が公式ホーム
ページでバックギャモン神社城下町の陥落を宣言した。そして三年
後、ハワイアン獅子舞神社は今も健在！しかし市ケ原のっぺらぼう
の森は日本妖怪組合から追放されたのだ。理由は「ひよっとこはク
ールじゃない」そこで中標津マンは異議を申し立てた。「日本妖怪
組合の処分を知らせるため、中標津家と中標津チーズを持ち出すは
ずがない」で、やっと「知床チーズ」を手に入れた。

その知床チーズは有名ですよ。「ハワイの海」の海で使ったことのある有名な知床チーズです。

中標津家は知床から離れたので、その流れはハワイに繋がっているそうです。中標津マンは不満を報復テロであらわした。「そんなことされたら、この街どこまでも流されるだろう、」「そうか。そう言うことだったのか、」「お前は余計なことというなよな」「そうだ。お前の悪評は世界に広がるんだ」中標津チーズは何でも思い通りに行きそうだ。「それでは今日中標津チーズが何の役に立つか説明しよう」言いながら中標津チーズは「中標津チーズはチーズクリームとチーズゼリーがある、」で、更に秘密を暴こうとした。そして「クリームとチーズゼリーはクリームチーズだから良い。そしてチーズは中標津チーズの方だ」「お前は勝手なことを言うなよな、」「チームを解散しろよ、」中標津チーズは更に秘密を暴こうとした。後ろに座る者たちに取り押さえさせなかった。「これは秘密だ、」「今はどこだ。そして誰なのだ、」「そうだ。チーズクリームもチーズゼリーも、お前は誰も知らないから安心しろ」「そうだ、そうだ、そうだ。知らない奴に取り押さえられた、」「誰が何を隠してもいい。これからは秘密だ、」「今俺が言いたいのはお前がいなくなる事だ。お前はチートを隠しているわけじゃないんだ、」「秘密だよ、」「秘密だ」「秘密、秘密だ、秘密だぞ、秘密だ、秘密だ。」そして時は戻る

中標津チーズは知床チーズと違って秘密は秘密。そう「秘密だった、ひみつ…?」

彼は我に返った。

「秘密、何の秘密だ。俺はこんなところで何をしようとしているのだ?」

季節は巻き戻って冬。北海道の冬は厳しい。寒いという間もなく心

が冷えて寒いという概念すら思考停止する。中標津チーズは雪を踏みしだきながら聖なるサイロへ向かった。そこには雪ん子が一糸まとわぬ姿でお経を読んでいた。

「この場所に何も有りません、ただお経が唱えられていますので中標津チーズ様が居たというなら、貴方はたまたま居た雪ん子に見えたというだけの事です」

彼は言われたとおりの場所に座り込んだ。

（何だ何だこいつ今の俺？）彼は心の中で思っていたがそれでも今の状況がいけないことだと理解できた。「中標津チーズじゃない、間違いなくそれを中標津チーズというのだ。誰が何を隠そうと中標津チーズだ」

そして、彼はチーズクリームを食べた。中標津チーズは何の説明もせずに行った。チーズクリームだけを食べ、彼はチーズゼリーとチーズゼリーを飲み干した。

「うまい：舌がツキノワグマとハワイアン獅子舞を踊っているようだ」

その蕩けるようなまろやかさに中標津チーズは感涙した。

「こんな、こんなおいしい物が俺の心の中に住んでいるなんて」

そう、中標津チーズは憎しみの炎で胸中を焼き尽くした後に真実の燃えカスを発見したのだ。

憎い、あいつを抹殺したい、誰でも持っている残虐性だ。どんな聖職者であろうともいかに清貧に耐えている人でも心に一点の曇りもないということはない。

もしあなたの前に「心が清らか」だと自己紹介したりあるいはそのようにもてはやされている人がいるとすれば、そいつは大ウソつきなのだ。だって人間は欲求で出来ている。腹が減った、眠い、恋人が欲しい。こういった一連の欲求はどれも人間が生きていくために

必要不可欠だ。その行動原理の先には今より安全でありたい幸福でありたいという向上心が隠れている。快適さを求めて活動しよりよい効率を模索する行為は人の知性だ。その精神活動が行き着く先に収奪がある。

自分から餌を獲らずとも誰かの収穫を横取りすれば働く手間が省ける。

つまりはそういうもろもろの日常生活的な欲望が攻撃本能に隠されているのだ。

「そして俺は常に誰かを憎み敵の影を追いかけていた。だからこれからは素直に自分の悪と向き合おうんだ」

そうやって彼はチーズの海に身を鎮めた。

中標津チーズが死んだ。訃報はたちまち知床に知れ渡った。

ショックを受けた知床マジシャン軍団はご当地ヒーローの自殺に茫然自失しどんぶりごはん60トンも喉に通らなかつた。

中標津チーズの告別式にはハワイアン獅子舞協会の残党も招かれ哀悼の意を述べた。

こうしてハワイアン獅子舞協会と知床ひょっとこ踊りの長い長いゴールデン巻物よりも長い戦争が終わった。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~26102

ハワイアン獅子舞協会のレモンラズベリーラブドリーム【完結】
2021年08月18日 19時24分発行